

遷延性意識障害患者家族の自立を高めるための看護ケア

高橋 智子、兼松 由香里、石山 光枝、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

【目的】看護職への依存が強い家族に対して、自立を高めるための看護援助が提供できる。【対象】研究期間：平成22年7月～平成23年4月 家族構成：患者20代男性、対象者は共働きの父母 患者の状態は平成20年7月交通外傷により遷延性意識障害の状態が2年以上継続。最小意識状態、声かけに対し時々「あー」と声を出す意思疎通困難。表情変化ほとんどなし。PEGより栄養を摂取。むせ込み時全身に緊張が入る。家族は患者の様子をベッドサイドで見守り、「看護師に全てお任せします」「私たちでは何もできないから」とケアへ参加してくることはなかった。【方法】日々のかかわりで家族へ直接「気がかりは何ですか？」と問いかけ、家族と看護師が一緒にできることを見つけ実行する。また、それらをチームカンファレンスで共有し、チームで統一した看護ケアを行うことを繰り返す。【結果】1.方法を繰り返すことで、家族と看護師間の「患者への思いに対する視点のズレ」が縮まった。2.家族へ具体的に問いかけたことで家族の思いが把握でき、すれ違いが少なく看護援助が提供できた。3.家族と共にできることを見つけ実行することで、家族の言動は積極的になり成功体験へ繋がった。4.チームで情報を共有することで、チームで同じ看護援助を提供することが出来た。【結論】家族の自立を高めるための看護援助として1.看護師の具体的な声かけで、家族の成功体験の機会を提供すること2.家族同士がつながりを持てる環境を提供すること3.家族主体となり在宅生活を思い描き、看護師と家族と一緒に楽しみを口に出すこと4.患者家族の経験を振り返り、家族と看護師との視点のズレを修正することが大切である。